

## 優秀賞

テーマ…多様性を認め合う社会をめざして  
「相棒・私の耳」

神奈川県・横浜市立ろう特別支援学校 高等部3年 常盤りお

「ねえ、その耳につけてるの触らせてよ。いいでしょ？」

年上の女の子2人が寄ってきて、突然補聴器に手を近づけてきた。何かする気だ。5歳の私でもそのくらいはすぐに分かった。「いやだ。いやだ」。私は必死に嫌かった。

これが聞こえないことに劣等感を持つようになった私の幼稚園でのひどい思い出。そして私は高等部でろう学校に入学するまでずっと、聴覚障害があることは恥ずかしいことだと思い続けていた。

消しゴムを忘れた友達に自分の消しゴムを半分に切っていると、「おい、見ろ！ 耳が聞こえないやつが消しゴムを切ってるぞ！ ハハ！」と言われ、周りが笑い始めた。ズキン。

音楽の時間には、「りおちゃん音痴だから歌わないで。ばれないように口パクで歌ってよね」。ズキン、ズキン。

昼休みのおしゃべりも、「えー、りおちゃん通じないじゃん」。ズキンズキンズキン。

耳が聞こえないことを言われるのは、いつも胸が痛かった。でもそんなとき私は「ごめんさい」と作り笑いをする。そうしたいわけではなかったが、他にどうしたら良いのか分からなかったからだ。

中学生になっても、月に1回ある通級へ通うために学校を早退することが恥ずかしかったし、部活動も補聴器を隠すための髪型がわざとらしくてさぼることが多かった。だから中3のときに進路を悩んだ。でも今までの自分を変えたいと強く思い、ろう学校を選択した。

入学すると、これまで分からなかった友達との会話や授業で先生が話すことがよく分るようになった。普通に考えられるとおかしいことかもしれないが、「分かる」ということ自体がとてつうれしかった。また、「耳

が聞こえないことは私もおも同じ。自分に自信を持つよう」と同級生に言われて、自分の耳に対して前向きにとらえられるようになり、恥ずかしいという思いも少しずつなくなっていく。耳のことをからかう人もいない、同じ悩みや苦しみを抱えている仲間がいることで心強さを感じた。共感し合える仲間に出会ったことで、私は安心して存在することができた。

高2になると、再び健聴の友達とも遊ぶようになった。自分で自分の障害を受け入れ、自信がついたからだと思う。髪を結んだときに見える補聴器もへっちゃらになった。自分を隠すことはやめたからだ。そうしていくうちに、だんだんと心が軽くなっていくように思えた。自分と同じ障害のある人との出会いが、私の心の奥底に沈んで凍りついたままの劣等感を少しずつ溶かしていつてくれた。

ふと今も、あの幼少期のことを思い出す。確かに嫌な記憶が一番に浮かぶ。だが、それはかりではなかった。私の周りには「やめなよ、嫌がっているよ」と言っていて私を助けてくれた友達がいた。手を震わせながら、補聴器を見せてと迫る年上の女の子に注意をしてくれた友達があった。「優しさ」はこのろう学校でも確かにあるのだ。最近は一つ上のいことが手話を覚え始めてきている。一つ一つゆっくりと手話で話してくれるいところにも心が温かくなった。私が補聴器を取ったときでも話せるようになりたいからだという。そんな「優しさ」をくれる人たちに、私は「ありがとう」と心の底から思う。

これからろう学校を卒業し、また大きな社会に足を踏み出す。だが、前と同じような壁にぶつかっても、今度はひるむようなことはないだろう。「相棒・私の耳」が私を強くしてくれたからだ。それに何より、支えてくれる人の「優しさ」にも気づけたから。だから、私は自分を信じて進んでいきたい。

そして将来は、ろう学校の教員になり、聴覚障害のある子どもたちに伝えていきたい。

「耳が聞こえないことは悪いことではない。聴覚障害があるからこそ、経験できることがたくさんあるのだから」と。